

子牛の下痢対策

～ 母子免疫を活用した下痢対策について ～

子牛をすくすく育てるために、下痢の予防は大切です！

牛下痢5種混合不活化ワクチンによる母子免疫を活用した下痢対策をご紹介します。

〈まずは母子免疫について！〉

出生直後の新生子牛は病気に対する抵抗力は**ほぼゼロ**です。このような新生子牛に対してなるべく早期に抵抗力を付けさせるために、**早期（分娩後6時間以内に！！）**の初乳給与が重要です。初乳により新生子牛に抵抗力を付けることを母子免疫と言います。

※ 初乳とは、分娩後一定の期間分泌され、子牛に抵抗力を付ける物質をたくさん含んだお乳のことを言います。

〈母子免疫を活用した下痢対策って？〉

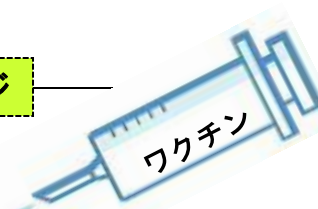
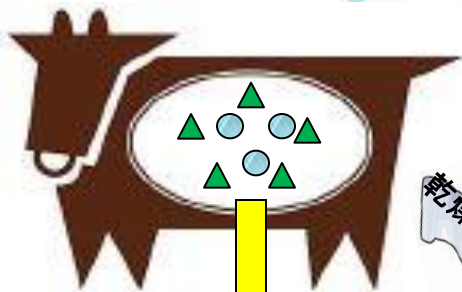
初乳には病気に抵抗する有効成分がたくさん含まれています。その有効成分の量は母牛の持っている抵抗力に左右されます。そこで分娩前の母牛にワクチン接種し抵抗力を付けることで初乳の有効成分が増え、生後に起こる下痢等の症状を軽減することができます。また、早期の初乳給与に併せて市販の乾燥初乳等を給与すると有効です。また、下痢を起こす微生物に対しては腸管局所での抵抗力も重要です。これを局所免疫と言います。自然哺育の場合には、免疫された母牛の乳汁を飲むことである程度の期間は下痢を予防することができます。

では本題の裏面へ！



母子免疫のイメージ

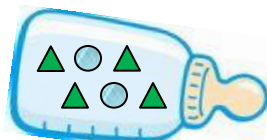
母牛



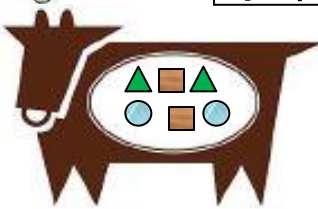
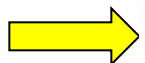
- ▲ : 免疫物質
- : ワクチン抗体
- : 初乳製剤からの免疫物質



子牛



初乳



腸管の局所免疫イメージ



飛騨家畜保健衛生所

TEL(0577)33-1111 FAX 32-9019 E-mail:c24508@pref.gifu.lg.jp

ご不明な点は、市町村担当者、獣医師もしくは家畜保健衛生所までご相談ください。

～ 牛下痢5種混合不活化ワクチンについて ～

1 牛ロタウイルス病；3種類

幼齢期の急性下痢で黄色水様性下痢便を排泄します。発生は生後3～4日からみられ、1～2週齢の子牛に多く、冬季に多発します。若齢牛ほど発病率が高く症状も重篤です。このウイルスには、たくさんの種類があり、本ワクチンには全国で多発している3種類のウイルスが入っており、ほぼ95%の感染を防ぎます。

2 牛コロナウイルス病

年齢を問わず発生する突発性水様性下痢で子牛では白痢、成牛では淡褐色、ときに粘血便を排泄します。乳牛では重度の泌乳量低下または泌乳停止を起こします。伝染性が強く、冬季に多発し、日中と夜間の温度差が激しい時期に発生する傾向があります。

3 牛の大腸菌症

病原性大腸菌の腸管感染によって起こる子牛の下痢で、数日齢以内の新生子牛に好発し、遅くとも1～2週齢までの子牛に発生します。激しい下痢（酸臭を放つ黄色または灰白色の水様性下痢便）を呈して死亡や発育障害の原因となります。

分娩前に母牛にワクチン接種することで、母子免疫によりこれらが原因で起こる下痢の軽減を図ります。下痢の原因となる微生物は、主に発病した牛の糞便が口に入ることによって感染します。他の微生物と混合感染することで症状と予後が悪化します。母子免疫を活用した子牛の下痢対策に併せて分娩時の衛生管理も重要です。

分娩後にはコクシジウム予防も子牛の下痢症対策に重要です

～ 分娩時の衛生管理 ～

- ・分娩房は清潔に保ち、敷料を多めに入れる（下はおが粉、その上にワラやストロー）。自然哺育の場合には、房を棒等で仕切り、子牛の居住専用区域を確保する。
- ・保温と換気が大切。特に冬場はすきま風対策が重要です。
- ・分娩房は、**除糞－水洗－乾燥－消毒－乾燥**を実施してから、次の分娩予定牛を入れる。

消毒は石灰乳の利用が効果的です。

